

「こんなん」 しています。

わだいとまわり

— 305 —

サンマ漁業発祥の熊野

サンマは秋の味覚の大衆魚、のはずでしたが、旬の今、近所のスーパーでは2本400円ほど、それも痩せて小ぶりです。サンマに何が起きているのでしょうか。

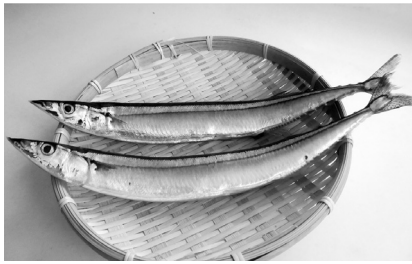
サンマ漁業は約300年前に熊野で始まり発展したといわれます。サンマのことを熊野では「さいら(さいら)」と呼びますが、これはサンマの学名*Saiaira*であり、古くは佐伊羅魚(さいら)と書かれていました。さいらの言葉が記された最初の文献は江戸初期の紀

州家の記録といわれ、今も熊野の方言で使われていることからサンマ漁の本場が熊野であったことがわかります。

かつて盛況だったサンマ漁の様子が那智勝浦町史に書かれています。

「町内で秋刀魚のとれる季節は12月から翌年2月ころまでで、正月のせまのころ山村の主婦たちが担ぎ籠をかついで夕方秋刀魚漁船の帰る勝浦港へ行き、秋刀魚を買って帰った。秋刀魚の季節には、和歌山の雑賀崎の秋刀魚船も多く勝浦港に入港し港は活気を呈した」とあり、漁船にあふれる

細くなったサンマ



細くなったサンマ

ほどのサンマを満載した昭和初期の水揚風景の写真が掲載されています。

サンマ船が着くと「さいら、取んにこいよお」と漁師が叫び、傷などで売り物にならないものを籠いっぱいにもらった、サンマは買っものではなかった。と昭和の半ば頃、那智勝浦や串本の漁村で子どもだった人の思い出。

それから半世紀、「地元のサンマは無いね」と

言います。サンマは熊野灘から姿を消したので

不漁、小型化の原因

サンマは近年、不漁で小型化傾向です。サンマの漁獲量は1950年代の最盛期には50万トを超えていましたが、その後

は20〜30万トほどで推移。徐々に減少し、ここ数年は激減し2021年は2万トを切りました。今年24年のシーズン初

す。

サンマが不漁で小型化している原因は

温暖化と気候変動の影響だと、国の研究機関は調査結果をまとめています。

南の海域で生まれたサン

マは成長しながら北上し、春〜夏に北太平洋の冷たい海域で餌のプランクトンをたっぷり食べ、夏〜秋に日本の近海に来

遊しながら南下します。私たちにとってのサンマの旬です。しかし、近年は海水温の上昇のため、サンマの分布や回遊域が沖合に移り、サンマが日本沿岸にまで回遊してこなくなると考えられています。沖合は餌密度が低くサンマの成長、成熟には悪影響なうえ、温暖化のため餌のプランクト



熊野の郷土食さんまずし

ンの量もサイズも小さくなってきているなど、サンマには受難の環境変化が小型化の要因のようです。また、公海での過剰な漁獲や乱獲など資源管理の問題もあります。

サンマが消え瘦せたのも全て人間の営みが原因というところでしょか。たっぷり太り焼くと脂の滴るサンマが1本百円だった頃がなつかしい。食卓と持続可能な環境問題がつながっていることをサンマが教えてくれます。

湯崎真梨子 (ゆざき まりこ)

和歌山大学食農総合研究教育センター客員教授

元和歌山大学教授、博士(学術)。専門は農村社会学、地域再生学。自らの研究に加え、地域と協働するプロジェクト研究をマネジメントしている。

プロ
フィル

